

故中野剛充さんの学問研究を偲んで

森 政稔

中野剛充さんの突然の訃報を聞いてから、1年以上が過ぎ去った。クモ膜下出血による突然死だと言うことを、後になってうかがった。中野さんは、チャールズ・テイラーほか現代社会哲学の研究者として知られ、若い世代の研究者をリードする存在として将来を期待されていたので、この逝去の知らせは、とても信じられなかった。彼はすべてを学問研究に捧げ、また現実世界と学問のあいだの問題につねに取り組むという、まじめすぎるほどまじめな青年であったから、彼の死はとりわけ悲しいものを感じられる。

私が中野さんにはじめてお会いしたのは、彼が東大文学部の社会学科の4年生で、進学先として私どもの大学院総合文化研究科を受験した面接試験のときだった。その時彼はたしか、マルクスらの疎外論と物象化論に関する論文を提出していた。入学後、指導教員を山脇直司教授とし、現代社会哲学の新しい領域に踏み込むことになった。

大学院進学後の中野さんは、当時ようやく注目されてきていたチャールズ・テイラーの自我論をはじめとする政治哲学の研究に本格的に取り組み、その成果は修士論文に結実した。この論文は非常に優れた学術的価値を有するものであり、これをもとに勁草書房より単著『テイラーのコミュニタリアニズム』（2007）が出版された。中野さんはこの時点ですでに、あとに続く社会哲学専攻の研究者たちにとっての道標となっていた。

このように中野さんへの学問的評価や期待が高まっていたのだが、彼はその誠実さゆえに深い悩みを抱え込んでいた。それは、単純化を恐れず言えば、学問とそれが対象とする社会とのあいだの、あるいは理論と実践とのあいだの問題であった。この時期に社会哲学が隆盛し、公共哲学と言う表現もなされて注目を集めるようになったのとは裏腹に、現実の政治の世界が閉塞していったことを中野さんは重く受け止めていた。貧困、格差社会化、差別と憎悪の感情の増大、そしてアメリカの「ネオコン」勢力伸長と報復戦争といった事態が続いた。中野さんと会って話をすると、いつもそんな暗めの話題になった。

こうした民主主義に逆行すると思われる状況のなかで、中野さんは社会哲学に何ができるのかを問い詰めていった。研究対象である当のテイラー自身について見ても、政治的活動や関心は控えめとなり、欧米社会についてのキリスト教的倫理の自己解釈の学へと沈潜していくように思われた。中野さんが、テイラー自身が好んだわけではない「コミュニタ

リアン」という概念でテイラーを解釈し続けたのも、知の政治参加への思いを込めたゆえにだと推測される。一方、学問研究を社会運動の論理に従属させるのも中野さんの選ぶ道ではなかった。学問と現実の社会とのあいだの引き裂かれる関係のなかに、彼はずっと身を置き続けようとしたのである。

本誌にエッセイを寄せてくださった坂口緑さんや橋本努さんをはじめ、中野さんは自主的な研究会である「テイラー研究会」などを通して、同世代のすぐれた研究者と交流を続けてきた。このたび、坂口さんのおかげで、中野さんが抱いていた博士論文の構想の概要が明らかになることを、大変うれしく思う。関係の方々の深い友情に感謝したい。